



指の先で感じるもの

1 1月の短編 2

m. suzuki

指の先で感じるもの

駅へと向かう通勤客の波がとっくに途切れた通りを、僕はぼんやりと眺めた。街路樹はあらかじめ色を変え、コートを着た若い母親が、子どもをしっかりと抱きかかえて足早に通り過ぎて行く。ゆっくりとした足取りで歩く老人の手には、温かそうな皮の手袋がはめられている。

夏から今日までが、ずいぶんと足早に過ぎてしまったことをあらためて感じた。それまでとは違って、週刻みで流れていく時間を、強く意識しているせいなのかもしれない。

店の中に視線を戻すと、アルバイトのように見える若いウェイトレスが、近所の住人らしき中年男と和やかに雑談を交わしているところだった。聞くとともになしに聞こえてくる会話に寄れば男は、商店街の一角にある花屋の店主らしい。店内に飾ってある花はもしかしたら、その花屋の商品なのかもしれない。

店にいる客は、僕とその店主の二人だけだった。もう少し早い時間ならモーニングの客でかなり賑わうのだが、さすがにこの時間になると、客足はぐっと減ってしまう。

テーブルの上に置かれた小さな花に、僕は目をやった。

ピンク色のかわいらしい花だったが、名前となると一向に判らない。

彼女なら判るかもしれないと考えかけて、すぐにそんな考えを追い払った。来ると決めつけているようで、何のためらいもなくそんな考えが浮かぶ自分が、なんだか浅ましい気がした。

毎週木曜日、午前十時。

場所は、僕の家からも彼女の家からもずっと離れた場所にある、この喫茶店。

それだけは決まっていたが、でもそれは、確実な約束というわけではなかった。彼女は毎週来るわけではなかったし、来たとしても時間通りとは限らない。

そして何より、もう二度と来ないかもしれない。

僕は少しぬるくなったカフェオレに口をつけてから、通りへとまた視線を戻した。

駅に近い場所ではあったが、大きな通りからは外れていた。周囲の道は一通ばかりで、車で通り抜けようとする、迷路にはまり込んだようになってしまう。

僕は毎週早めに来て、だいたい同じ席に座って、こんなふうに通りを眺めながら彼女が来るのを待っている。駅から店までは、この通りを抜けて来るのが一番近い。道はまっすぐに駅前まで続いていて、駅を出て少し歩いただけで、彼女の姿をこちらから見つけることができる。そして彼女の姿を見つけた僕は、もう二度と会えないかもしれないという一週間分の不安から、ようやく開放されるのだ。

七月の最後の日曜日だった。

いつもなら木曜しか休みのない僕が、先輩との交代で、思いもかけず日曜に休むことになった。人が働いていない時間に仕事をするしかない職種で、日曜休みのシフトは、大先輩の特権だった。その大先輩がどうしても木曜に休む必要があって、運がいいのか悪いのか、僕のところに交替の話が回ってきたのだ。この職についてから日曜に休んだことなどない僕は、人ごみが極端に嫌いなせいもあり、いつもより遅く起きた後は部屋でぼんやりと過ごしていた。昼過ぎになって、届いてはただ積み重ねてあった郵便物の束から、高校の同窓会の案内状を見つけた。木曜

休みには縁のないものと、端から目を通すこともしなかったらしい。

日時はその日の夕方で、場所も、僕の部屋から一時間もかからない店だった。

思い切って幹事に電話を入れると、会費は少し割高になってしまうが、当日参加も大歓迎との返事だった。気をよくした僕は、久しぶりに会うバスケット部の連中の顔を思い浮かべながら、いそいそと出かける仕度を始めた。

連中に会うのは四年ぶりだった。学生時代には同部会と称して何度か集まったが、就職してからは、それぞれの仕事のペースもあり、なかなか頭数がそろわなかった。同窓会は毎年あったらしいが、木曜休みの身としては、週末休みのサイクルに合わせるすべなどない。

でもその日は、どういうわけか偶然ばかりが重なった。

いつもは土曜に開かれる会が、今年はたまたま日曜だった。そしてたまたまその日に休んでいた僕は、たまっていた郵便物が目に付き、その束に手を伸ばした。

そして偶然は、そこに留まらなかった。

店は貸し切りで、昔からのりのいいバスケット部グループは開始早々、すでにかんりの盛り上がりを見せていた。就職四年目ともなれば職場の愚痴には事欠かず、結婚へと続いていきそうな恋愛もそろそろ、ちらほらと姿を見せ始める頃だった。仲間内のそんな暴露話を肴に、僕たちは賑やかに杯を重ねていた。

会が始まって一時間近くたとうとしていた頃、店のドアが静かに開いた。僕は背中を向けていたので気付かなかったが、正面に座っていた人間が、ぴたりと動きを止めた。怪訝に思って振り向くと、ドアのすぐ脇に、彼女が立っていた。

店の中が一瞬、それまでの喧騒が嘘のように静まり返った。誰が入ってきたのか気付くのに、少し時間がかかったせいだろう。それぐらい、彼女の印象は違っていた。

「……遅れてごめんなさい」

かなり小さな声だったが、それでも通りはよかった。

「来てくださっただけで大歓迎っ！」

酔いに任せた大声が、どこかから飛んだ。それを合図に店内はすぐにざわめきを取り戻し、彼女は学校当時仲のよかった女の子のグループへと吸い込まれていった。

「声、かけなくていいのか？」

少しして、当時のいきさつに少しだけ詳しい一人が、小声でささやいた。

「ああ、うん」

僕はあいまいに頷いたが、内心穏やかではなかった。

小さいながらも家具工場を経営する家の、彼女は一人娘だった。目だって美人というわけではなかったが、手に本が張り付いてでもいるような、いわゆる文学少女だった。とは言え、静か過ぎるというわけではなく、話しの輪にいるときにはそれなりに発言もするし、極端に運動が出来ないというわけでもない。可もなく不可もなく、失礼ながら、最初のうちはずっとそんな印象を持っていた。

一学期の途中で席替えがあって、たまたま隣合わせになった。話してみれば意外にさばさばしていて、男同士で話しているかのようで、文学少女とのギャップがかなり面白いと感じた。話し

かけても気付かないほど川端康成に集中するくせに、レッドソックスの熱狂的なファンでもあった。本の汚れは神経質なほど気にするくせに、髪の毛の寝癖には無頓着だった。

文学少女だけあって国語の成績はずば抜けていたが、反面、信じがたいほどの数学音痴だった。あまりのひどさに呆れた僕は、数学なら得意だったこともあり、基本的なことを教え始めた。僕にしてみれば寝ていても解けるような問題が、彼女にとっては難問だった。三年になるまで何を聞いていたのかと思ったが、本を読んでいたという答えが帰ってきそうで、結局言わずにいた。僕はほとんど、本を読まない人間だった。数学以外取得はなかったし、どちらかと言うと、体を動かしていることのほうが好きだった。

共通点などまったくくないような僕たちだったが、不思議と話しは合った。今思えば、物事の見方に似たようなところがあったのだと思う。でも当時は、そこまで突き詰めて、お互いのことを考えたことはなかった。話していると楽しい、それだけで十分だった。

「ああ、だめだ、わかんない」

彼女はよくそう言って、問題の途中で音を上げた。私立文系とすでに決めていた彼女は、例えすれすれでも、単位さえ取ればそれでよかったのだ。

「こつさえわかれば、何てことのない問題なんだけどな」

「そう言える人が、偉人に見える」

「これしきで偉人なら、楽なもんだ」

「ねえ、やっぱり、数学者かなんかになるの？」

大げさな質問だと思ったが、悪い気はしなかった。

「コンピューターのプログラミングに興味があるんだ」

ひそかな夢ではあったが、彼女に話すにはためらいがなかった。

「へえ」

「そっちはやっぱ、小説家かなんか？」

「まっさか。読むのは好きだけど、書くのはてんでだめ。わたし、横光利一の研究がしたいんだ」

「誰それ？」

「昔の小説家」

「ふうん」

進路に関して言えば重なる部分はまったくなく、それがよかったのか、一緒にいる時間は少しずつ増えていった。クラスの中ではいつの間にか、僕たち二人は付き合っていることになっていた。ちゃんと確かめたことがなかったので事実とは言い切れなかったが、二人とも、あえて否定することはなかった。

そのあたりをようやく確かめたのは、そろそろ受験も近づいた、二学期の末のことだった。

「いまさらなんだけど……卒業しても、会ってもらえる？」

期末試験に向けての数学の講義をしながら、僕はおそるおそるたずねた。

「ほんとにいまさら」

彼女はそう言うと、笑った。

学校の授業が終わった後いつも、僕たちは毎日一緒に、何時間か勉強をしていた。それぞれがまったく違う勉強をしていることもよくあり、そんなときは会話をすることもあまりなかったが、それでも、一緒にいられるだけで気持ちは不思議と安らいだ。結局は、そうしたいから一緒にいるという、それぞれにとってごく自然な状況だったわけで、口に出して確かめる必要など特になかったのかもしれないが、念のためそうしておいたほうが良いような気が、そのときはしたのだ。

そして僕たちはその日、初めてキスをした。

彼女は予定通り地元の私大に合格し、僕は志望を一つ下げたものの、ほぼ予定通り、某国立大の数学科に合格した。それぞれの大学は電車で三時間ほど離れた場所にあって、高校時代のように頻繁に合うことはもちろん出来なくなったが、それでも僕たちは、月に何度かは会っていた。

毎週木曜日の、午後一時。

場所は、二人が通っていた高校からさほど離れていない、小さな喫茶店。

どういうわけか二人とも、一年目も二年目も木曜の授業が午前中しかなかったため、そんな約束が出来上がった。でも約束はそれだけだった。前もって連絡し合うことも、ほとんどなかった。相手が来なければ都合が悪いのだなと解釈したし、例えそれが二度、三度と続いても、相手を責めるようなことはまずなかった。彼女は座り慣れた椅子でずっと本を読んでいたし、僕はいつも、プログラミングの勉強をしていた。ふと気付くと夕方になっているといったことも時にはあったが、自分の集中力に感心するだけで、淋しさを感じるようなことはあまりなかった気がする。

もう来ないと決めたときは必ず伝えること。

この大雑把な約束をしようと考え付いたとき、僕たちは前もって、それだけは絶対に守ろうと決めていた。だからその連絡がないうちは、今日はだめでも来週は来るだろうと、そんなふうなのん気にしていられた。

別々の大学に通えば別々の時間が増えて、別々の日常が増えて、相手のことがわからなくなったと、そんなことをつい感じてしまいかねない。お互いに信じるしかない中で、そんなことを感じ始めてしまったら、きつときりがなくなる。

それは、文学少女らしい彼女の考えだった。

そうなってしまったら離れている時間が長い分、きっと、收拾のつかないことになってしまう。そうならないための解決策として彼女が考え付いたのが、この大雑把な約束だった。僕は彼女の考えに全面的に賛成し、そして僕たちはずっと、ほどほどに幸せに、大雑把な約束を守り続けた。

三年になって木曜が土曜に変わり、四年になると日曜になった。他に変わったことと言えば、三年の途中から一人暮らしを始めた僕の部屋に、彼女が泊りに来るようになったことぐらいだろうか。そんな日僕たちはよく翌日の授業を半分さぼって、そしてずっと寄り添っていた。

大学を卒業しても、会ってもらえるだろうか。

念のため確かめておいたほうが良いような気がしたが、いまさらと言ってまた彼女が笑い出しそうで、ずいぶんぎりぎりまで、何も言わずにいた。

もう約束は守れない。

彼女が電話でそう伝えてきたのは四年生の十二月、クリスマスの直前だった。ぼくはもう彼女へのプレゼントを用意していたし、例の言葉を持ち出して、先のことを確かめる準備も出来ていた。でも結局、その必要はなくなってしまった。

「今年はピンクのポインセチアが入荷するんだ」

「ピンク？」

花屋の主人の言葉がはっきりと聞こえて、驚いたように聞き返すウェイトレスの声も聞こえた。

ポインセチアとはどんな花だったかと考えていると、通りを走ってくる彼女の姿が見えた。壁の時計は、十時三十分を過ぎていた。

「ごめんね」

店に入ってきた彼女は、僕のそばに立つとすぐにそう言った。息が切れていた。

「走らなくてもいいって、いつも言ってるのに」

「でも、待たせてると思うとつい……」

毎週のように繰り返されるそんな会話をまた口にしながら、今週も大丈夫だったと、僕は内心、胸をなでおろしていた。

大雑把な約束、しょうか。

思わぬ偶然が重なったあの同窓会の日、深夜になっても一向に気温の下がらない街を、僕と彼女は並んで歩き続けていた。二次会が終わる頃には人数が最初の半分ほどになっていて、これからどうしようかとみんなで話しているうちに、さりげなく離れた彼女を、僕が追いかけたのだ。

やめておけと聞こえたのは、誰かの声だったのか、あるいは自分の声だったのか。

自分でも、何が話したいのかはわからなかった。でも今話しておかないと、またずっと会えなくなってしまうそうだと、そんな焦りがあった。取り戻せるものがあると思っていたわけではもちろんなく、その機会は永遠に失われてしまっていたことも判っていたはずなのに、それでも僕は、彼女を呼び止められずにはいられなかった。

何も言い出せないまま彼女の少し後ろを歩いていると、しばらくして彼女が歩くスピードを緩めて、僕に並んだ。地下鉄の駅は少し前に通り過ぎていて、終電は五分ほど前に出たところだった。

もいっかい、大雑把な約束しょうか。

前を向いたまま彼女が小さな声で言ったのは、それからさらに三十分は歩き続けた頃だった。彼女はたぶん少し酔っていて、僕もまだ、少し酔いが残っていた。

そして僕は、彼女がまだ約束のことを憶えていたのだとわかった瞬間、彼女の腕をつかんで、抱きしめていた。

「ご注文は？」

脱いだ上着を脇の椅子にかけ、彼女が一息ついた頃を見計らって、若いウェイトレスがやって来た。

「紅茶、ください」

「少々お待ちください」

いつも通りの注文にいつも通りきちんと頭を下げて、そしてウェイトレスは、カウンターへと戻って行った。

「いいなあって思って、探したんだけど見つからなくて」

「え？」

唐突な彼女の言葉の意味が、僕はまるでわからなかった。

彼女は昔からこんなところがあって、突然変わった話しの主語がなくて、まるで文脈の見えない僕はよく戸惑った。

「この香り」

「香り？」

「気が付かない？ あの子がそばに来るといつも、この香りがするの。グレープフルーツかな」

彼女はウェイトレスが歩き去った方向にちらりと顔を向けると、少し首をかしげて見せた。

「そう言われれば……」

気付いていたような気付いていなかったような、ほとんど気にも留めていなかったかすかな香りを、僕はあらためて意識した。

「かわいい香りだなあって思って、この間買い物に出たとき探してみたんだけど、同じのは見つからなかった。もしかしたら、特別に調合してもらってるのかも」

「へえ、そんなことも出来るんだ」

「そう。いろいろな香りを少しずつ混ぜて好みの香りにしてもらうんだけど、でも難しいのよね。嫌味になっても困るし」

彼女の耳の後ろあたりからも、少し甘いような、かすかな香りがする。あの夜何年かぶりに抱きしめてその香りに気付いたとき、僕は一瞬、時間の感覚をなくしてしまったような気がした。有無を言わず、いくつもの思い出が次々と頭をよぎった。でも鈍感な僕は、あの頃と同じ香りなのだと気付くのに、ずいぶん時間がかかった。

君の付けてる香りも、結構好きだけどな。

そんな言葉が口をつきかけたが、いまさら言うのも虫がいい気がして、そのまま飲み込んでしまった。

僕を見たまま、彼女がくすりと笑った。

「何？」

「ううん、何でもない」

彼女はそう答えたが、おそらく僕の考えていることに気付いたのだろうと思った。全然変わってないと、そんなことも思っているのだろう。

考えていることをさほどためらわずに口に出来る、僕がそんなタイプの人間だったら、結果は違っていたらどうか。

あの頃何度か、そんなことを考えた気がする。でも僕は、悶々とした中で浮かんでくるそんな考えを何度でも打ち消した。僕はたぶん、どんなにがんばってもそんなふうになることは出来ない。そして案の定、四年たっても何も変わらず、いまだにこうして、自分の言葉に自信を持つ

ことが出来ない。

「お母さんの具合、どう？」

「うん、相変わらず」

彼女の母親が入院したのは、六月の末のことだった。そして彼女は、忙しい父親に変わって看病をするため、七月になってから急遽帰国した。

きちんとカールした長い髪、うっすらとした品のいい化粧、きれいに塗られたベージュのマニキュア。

どれも僕の知らない彼女で、二年間のイギリス暮らしと結婚相手とが、彼女にもたらしたものなのだろうと思った。

「でも、病室に一人でいるのがずいぶん心細いみたい。わたしが帰ろうとすると、泣きそうな顔するの」

「そう」

よく笑う、元気のいい人だったことを憶えている。家具工場の事務員も兼ねていて、お茶を飲む暇もないほど忙しいのに、僕が訪ねていくとよく、おなかが空くといけないからと言って、インスタントラーメンを作ってくれた。僕と彼女のことに、比較的寛容だった。

命に関わる病状ではないと聞いているが、一人娘を遠くに手放してしまったことが、ずいぶんとこたえているのかもしれない。

「お待たせいたしました」

ウェイトレスがやってきて、彼女の前に紅茶を置いた。いつの間にか、花屋の店主は姿を消していた。

「どうぞごゆっくり」

ウェイトレスが離れると、彼女の言う通り、グレープフルーツに似た香りが漂った。

「ね？」

「うん」

「……疲れてる？」

頷いて見せた僕の顔をまじまじと見てから、彼女がたずねた。

「そうでもないけど」

「うそ。目が少し二重になりかかっているもの」

昔から僕は、寝不足が続くと目が二重になってしまう。もちろんそれで目が大きくなることはないので、結果、小難しげにしかめた顔が出来上がる。

「仕事、忙しいの？」

「うん……ちょっと、プログラムに不具合が見つかって、それを今朝方までかかって直してたんだ」

小さな会社ではあったが、僕は希望通りプログラマーの職についた。でも小さな会社なので、プログラムに関わる人間は当然、その修正にも関わらなければならない。そして僕がうかつにも見逃していたことだが、プログラムの適用も修正も、コンピューターが働いていないときにしかすることが出来ない。よって僕は、人が働いていない時間に仕事をするのが圧倒的に多い。

「今朝方って……やだ、それなのに、どうして来たりしたの？ 休まなきゃ、体壊すよ」

「うん……」

彼女の言葉に、僕はあいまいに頷いた。

それでも会いたくて。

そう、ためらいもなく口に出来たらどれほどいいか。

「……ごめん」

はっとしたように一瞬口をつぐむと、彼女は小さな声でそう言って、うつむいてしまった。

三ヶ月間という約束で一人帰国したのだと、彼女がようやく事情を話したのは、四年ぶりにお互い確かめ合って、そろそろ始発が動き出すかという時間だった。三ヶ月たてばまたイギリスに戻ることがわかっていながら、彼女は大雑把な約束のことを口にしたのだ。

からかうつもりだったのか。

ついそんな言葉が口から出ていた。

ずっときれいになった彼女の姿に、僕はたぶん、苛立っていたのだと思う。彼女に触れながら、この体にいつも触れている誰かのことを、どうしても考えてしまっていた。

自分でもわからない。

泣きそうな顔で、彼女は言った。

もういいよ。

僕はすぐにそう言って、彼女をきつく抱きしめた。

帰る場所がある人間は気楽だ。

そう言って彼女を責めることは簡単だった。その場に彼女を残して、一人で帰ることだって出来た。でも僕はそうしなかった。体調が悪いから遅れると会社に連絡を入れ、午前中いっぱい彼女と一緒に過ごした。授業を半分さぼってずっと寄り添っていた、あの頃と同じように。

自分でもわからない。

彼女のその言葉は、僕自身の言葉でもあった。

就職をして四年、自分の進みたかった道を進み始めたはずなのに、いつもどこかで、何かが違うと、そんなことをうっすらと感じていた。それならいったいどうしたいのだと、そう問い返す自分自身に対して思いつく答えは、あの頃はもっと自分らしかったと、そんな子どもじみたものでしかなかった。でもそれが、僕が思いつく答えのすべてだった。

彼女も同じなのではないか。

自分の都合のいいように引き寄せただけなのかもしれないが、僕はそう感じた。

大雑把な約束。

そんなものがあれほど長く続いたのは、僕たちが二人とも、自分の中で高ぶるだけ高ぶった感情と向き合うのを、避けたいと思っていたからなのだ。自分の思いを声高に主張して、ぶつかり合って、傷ついて、そんな生々しい場面を経験したくはないと、そんな臆病な心を持っていたからだ。それを僕たちは、幸せが穏やかに続いていると、そんなふうに考えた。自分たちの関係を自分たちだけでちゃんとコントロールしていると、そんなふうに考えていた。物事の見方がよく似ているからこそ、僕たちは一緒に、そんな結論を出すことが出来たのだろう。でもそれはた

ぶん、現実とは少し違っていたのだ。

卒業が近づき、社会が近づき、二人のことが二人だけの問題ではなくなっていくことに少しずつ気づき始めたとき、上手くコントロールできていると思っていた世界は、実はもう少し複雑で、もう少し難しいのではないかと、僕よりも早く彼女が、そのことに気付いてしまった。僕はしばらくの間途方にくれ、それでも飲み込むしかなかった。

小さいとは言え、彼女の家が経営する家具工場には、多くの従業員がいた。別に継いでくれなくてもいいと、彼女の両親は早くから彼女にそう言い続けていた。娘ひとりしか授かることが出来なかったのだから、仕方のないことだと。でも祖父の代から続く工場には、地元の間がが多く勤めていた。同じ高校に通う人間の親たちも、何人かいた。不況のあおりを受けて、大手家具メーカーからの資本を受け入れるしか道はないというとき、そんな状況を無視して自分の好きな道を進むことが、果たして自分ならできるだろうか。

離れるのなら今のうちだと、彼女が出した結論に、僕は到底、反論することなど出来なかった。その場に踏み入っていく勇気も余裕も、当時の僕には何一つなかった。

「いつの間にか、冬になるな」

僕はうつむいた彼女から目をそらすと、窓の外へと視線を向けた。

授業はどうしたのか、ポケットに手を突っ込んだ男子学生が二人、笑いながら通り過ぎていく。

。

「……うん」

三ヶ月の予定が一ヶ月ほど延び、あの同窓会の日からもう、四ヶ月近くたつ。彼女の母親の病状は一進一退を繰り返していて、退院にこぎつけるまでは、もう少しかかりそうだった。

あなたと別れたこと、一番驚いたのは、たぶんお母さんだと思う。

僕と同じで一度も顔を出さなかった同窓会に、何故顔を出す気になったのか。

たずねたことは今日までないが、実家の彼女の部屋に案内状が置いてあったのだと、それだけは聞いていた。案内状が届いたのはたぶん五月ごろのことで、部屋に置いたのはおそらく、まだ入院していなかった彼女の母親だろう。

結婚して名字こそは変わったものの、彼女は実家のすぐ近くに住んでいた。結婚相手は家具のデザインを勉強していた人間で、彼女の実家に出資をした家具メーカーでアルバイトをしていた関係で、彼女とも知り合ったという。その後彼はその家具メーカーに就職し、しばらくして彼女と結婚したが、結婚して一年もたたないうちに、イギリスへの転勤が決まってしまった。口では栄転を喜びながらも、彼女の両親の気持ちは複雑だったに違いない。彼女のいない生活が二年続き、彼女宛に届いた同窓会の案内状をわざわざ部屋に置いた母親の心境は、いくら鈍感な僕でも察しがつく。

母親に何かの意図があったとまでは思わないが、何かが違うと感じている娘の微妙な心情に気付いていた母親が、娘が一番娘らしかったころのことを思い浮かべたとしても不思議ではない。

もいっかい、大雑把な約束しようか。

僕が出した条件はたった一つ。

もう約束が守れなくなっても、何も言わずにいて欲しい。

あんな宣告じみた電話を受けるのは、もう二度とごめんだった。

でも四ヶ月が過ぎて、僕は判らなくなり始めている。きっぱりと宣告を受けたほうがいいのか、それとも、今日も来なかったと、そんなふうにして一ヶ月も過ごして、ゆるゆると気付くのがいいのか。

また、同じことを繰り返そうとしているだけではないのか。

一瞬大きく風に揺れた街路樹を見て、僕は思った。

それでも。

「行こうか」

彼女を見て、僕は言った。

それでも、僕は彼女に触れたい。

彼女は無言のまま、小さく頷いた。

たぶん、もうあと何日もしないうちに、彼女は元の生活に戻っていくのだろう。それでも、例え今日が最後だとしても、僕はこうして目の前にいる彼女に触れずにはいられない。僕のために、彼女は今ここに立っているのだから。

店を出てすぐ僕は、彼女の手を取った。再会してから、人目のあるところで彼女に触れるのは初めてだった。

一瞬驚いた様子の彼女だったが、それでも手は、つないだままだった。

「来週は、もっと寒くなるんだって」

少し歩いてから、彼女が言った。

「そう」

僕は頷くと、つないでいる手に力を込めた。